

## マルメ大学研修報告書

### －Internationalization at Home:国際力をもつ広大人の育成－

広島大学社会科学研究所科学学生支援グループ

野地 知子

研修期間 2007年4月17日～2007年4月25日

研修場所 マルメ大学国際部および学部コーディネータ等

研修内容 非英語圏の大学における国際交流について

#### はじめに

今回のマルメ大学での研修に際して、私は「大学内の国際化を推進するにはどうしたらいいか」、「日本人学生と留学生学生の双方に利益をもたらす大学の国際化とはどのようなものか」という2つの問いを持って臨んだ。国際化推進は、かけ声だけでは困難であり、本当に国際化を実現するためには、かなり広範囲の関係部署に多くの負担を及ぼすことになる。国際部に所属している時より理解してきた。しかしながら、平成17年に「国際戦略本部」を設置し、国際化を組織的に推進しようとしている本学が「国際化を広島大学の特色の一つ」と言い得るためには、今、何らかの具体的な方策を実施すべき時期にあると痛感している。そこで、本報告書では”Internationalization at Home”としてマルメ大学の国際化推進状況を報告し、さらに広島大学の国際化推進のための提案を行いたい。

#### 1. マルメ大学の特色について

マルメ大学はスウェーデンの第3の都市、マルメ市に1998年に創設された大変新しい大学である。スウェーデン国の教育方針とEUの教育政策の両方からの影響を受けながら高等教育の期待を担って設立された。高等教育の現状および大学の運営方針から国際化はマルメ大学にとって必要条件であるといえる。

特に印象的だったのは、大学の国際化が地域の国際化とともに進展し、日常生活に浸透していることであった。そこで、マルメ大学の特色の中で国際化推進と関連するもの、1. 優れた英語運用力、2. 学際的研究領域、3. 学生の多様性（年齢のばらつきも含む）について述べてみたい。



##### 1) 優れた英語運用力があること

今研修で訪問した各部署の教職員学生の全員が流暢な英語を話すことができる。例えば、私が参加した会合では使用する言語をスウェーデン語から英語に変更してくれた。

もちろん通訳はいない。この十分な英語運用能力を有している背景は以下の点にあると考える。

- ①小学校3年から英語学習が始まること、
- ②スウェーデンの人口は約 900 万人で、翻訳が商業ベースに合わないため、字幕や吹き替えが少ない。そのため、英語がそのままメディアとして流入していること。
- ③そのうち、移民が約 120 万人と多く、スウェーデンの教育において多様性は前提ともいえること。
- ④マルメ市の中心から電車で 30 分以内にデンマークとの国境があり、異文化との接触は日常的であること。

このように、英語を使う環境が幼い頃からあり、小学校卒業時点で多くの子どもは英語が問題なく使えるようになってきていると聞いた。その後も多国籍住民と共生していくことにより、英語でのコミュニケーション力は母国語レベルとまでは言えないが、英語運用力は十分である。

## 2) 学部、研究科が学際的研究領域で構成されていること

マルメ大学創設の目的の一つであるところの、社会のニーズにあった研究を中心に教育研究組織が構成されているため、伝統的な学部、研究科の領域区分とは異なる。

学部は以下のとおり

The Faculty of Health and Society, the Faculty of Odontology, the School of Arts and Communication, the School of International Migration and Ethnic Relations, the School of Teacher Education, and the School of Technology and Society

この学際的領域区分が学生にそのテーマに関して最も総合的視点を獲得するための幅広い知識を提供している。教育研究において伝統的学部、研究科の境界を越え、異なった専門領域の教員が教育において協同する。その結果、その学際的構成が学部や研究科に幅広い知識の息吹を与えて、技術と社会の相互発展が影響し合って多方面にあらゆる方向からの発展を促している。

また、マルメ大学の重要な教育目標は市民の教養教育への貢献である。教育の目標は競争力を持った専門家の養成のみではなく、責任のある行動する市民を育てることをも重要視している。つまり、実社会に貢献できる科学技術の発展と人材育成が教育研究の目標であるといえる。

## 3) 多様な学生（年齢のばらつきも含む）層からなること

マルメ大学の学生の平均年齢は 26-27 歳で、35%は 30 歳以上である。マルメ大学には就職後に大学に進学する学生、フルタイム学生、パートタイム学生など、彼ら自身のキャリアに対する目的意識の高い学生が多く、学生層は多様である。(1998 年から行動計画、学生層に占める多様性で二度表彰される。)

また、大学創設当初より、地域と強い絆で結びついていたため、大学はコミュニティの多様性を反映した役目、例えば幅広い入学者の受入れ、地域の発展に貢献するなどの

役割を果たすことが重要であると期待されている。広範囲からの学生募集に最も成功している教育機関として 2004 年に国立高等教育機構より表彰を受けている。

今後の課題として、多様な学生募集の中での優秀な学生の確保などが挙げられるが、母国語と英語で構成される地域、EU の一員、移民の多さなど、マルメ大学を取り巻く環境を生かして国際化を推進していると言える。

## 2. マルメ大学の国際化”Internalization at Home”について

国際化は 1998-2005 の間、Dr. Bengt Nilsson により推進された。彼の用いる国際化の定義の中に「国際化は終わりのない過程であり、その取組みは状況変化に対応して変化していくものである。」という部分があり、彼は国際化の取組みを大学教育の一部と捉えているといえる。(2004 年スウェーデンの高等教育国際化評価では第 2 位となり、マルメ大学を特徴づけるものとなった。)

マルメ大学の教育研究を貫く指針として、Migration and Ethnicity, Gender, Environment の 3 つがあり、これらは国際化と大きく関連している。さらに「マルメ大学 2015」の中にも国際化は含まれていて、「全ての国際化（流動性、学生交流、教育課程）」をめざしている。これは、学生の 90%以上は海外留学を経験しないマルメ大学では、学内の国際化が重要であるというコンセプトによる。これにより”Internationalization at Home”が学内に徹底され、多くの職員が国際連携に強い関心を持つなど、学内の連携の強さは、各部局にいるコーディネータ（専門職）が国際部と連携して、国際化を推進している点からもいえる。課題としては、研究者の交流（派遣）において、意欲を高める工夫が必要であること、例えば、旅費の問題、授業の代替問題などがある。



### Strategic Plan for Internationalization (1999)

1. 変化する世界で広く交流，連携するための準備としての知識の創造，他国の文化，宗教，価値観の理解
2. 国際化の最も効果的な形は学生と教員の流動性である
3. 国際化の過程は全ての職員および学生を包含するべきである。
4. 流動性を刺激するためには，過程は学内からスタートしなければならない。
5. 学生の流動性を推進するための重要な集団は大学教員である。
6. 交流の重要な事柄は語学能力である。

## 3. 広島大学の国際化”Internalization at Home”のために

今回の研修を通じて広島大学の学内の国際化推進について、私なりに考えてみた。学内の国際化を推進する上で有効だと考える 3 つについて述べてみたい。

### 1) 日本人学生と HUSA 学生との交流の拡大

これまで、HUSA 留学生同士、あるいは一部のチューター学生との交流はあるが、それ以外の交流はあまり多くない。そこで、双方にとって刺激となる取組みを実施できないだろうか。例えば、

①HUSA 学生の自国や所属大学について発表の機会を与え、広島大学の日本人学生および教職員の刺激とする。特にチューターになっていない多くの学生達に刺激を与えることが重要だと考える。

②HUSA 等での留学経験を持つ日本人学生による英語強化方法を伝える英語学習サポーター制度をつくり、外国語、例えば英語の学習方法に学生同士でアドバイスする。具体的な英語学習をどうしたらいいかなど、経験に基づくアドバイスができる。

③新入生への英語学習動機付けをねらって「異文化を学ぶ」等として、教養ゼミ、広島大学ゼミあるいは講演会などのようなものでも、広大学生に早期に国際力を付ける授業科目の一部に HUSA 学生や、帰国した日本人学生の活用が考えられる。

### 2) 人的ネットワークとメールアドバイザー制度の構築

①外国からの研究者や留学生に対して、日本文化や習慣、日常生活から社会生活まで、来学する外国人の母国で滞在した経験を持つ教職員や学生がサポーターとして日常生活のアドバイスをする人の人材ネットワークを構築する。

②メールアドバイザー制度等で本学や地域の情報を発信し、来日に向けて安心できるよう支援する。例えば、ボツワナから研究者が3ヶ月間来ることになった場合、その受入教職員は大学のネットワークからボツワナ滞在経験者と連絡をとり、気候や住居、経済的価値観等、その国やその文化など、日本滞在の Q and A に答えたりすれば、心配が少なくなるだろう。個人的に過剰な負担とならないように、組織的に支援することというまでもない。

今日のように大学を取り巻く環境が激変し、教職員が多忙を極める中では、海外からの研究者や留学生に対する支援のための時間を捻出することに躊躇するかもしれないが、一つのメールに回答することで、全く知らない外国に滞在する心細さが僅かでも解消するのであれば、国際化を掲げている本学として十分に価値のある行動と言えるのではないか。

### 3) 教職員同士の海外出張経験の共有化

海外の大学に出張する際に訪問先の大学(研修者)から情報収集するのはもちろんだが、日本との比較ができるのは日本に滞在したことのある人には敵わない。そこで、本学の教職員の出張経験を共有化し、随時更新することで海外での危機管理の一面も果たせるのではないかと考える。



以上、今回の研修を通じて学び、経験し、考えたことである。マルメ大学を訪問して初めて気づいたことや、研修前の計画から変更したところもあるが、大学の国際化に関して私の考えを明確にでき、大変参考になった。

最後に、2007年4月に国際部から社会科学研究所学生支援グループに異動となり、国際部および社会科学研究所学生支援グループの方々には大きな支援をいただきました。また、マルメ大学の国際部長はじめ、多くのスタッフに大変お世話になり、心より深く感謝しています。

マルメ大学で出会った方々（一部）

**Knut Bergknut, Director of International Affairs**

**Gunilla Pffannenstill, International Relations Officer**

**Pia Larsson, International Relations Officer**

**Carl-Gustav Carlsson, Head of Department of Student Affairs**

**Jesper Liedholm, Editor / Press officer**

**Mans Renntun, Information Officer**

**Johan Ohlson, Programme Coordinator, Teacher Education**

**Annika Landbarg, International Relations Officer, Teacher Education**

**Mikael Matteson, Information Officer, School of Health and Society**

**Pelle Hallstedt, Senior Lecturer, Social Work, Ph.D., Faculty of Health and Society**

**Peter Carlsson, Director, Faculty of Odontology, WHO Collaboration Centre**

**Jayanthi Stjernsward, BDS, Ph.D., WHO Collaboration Centre**